

二十六夜

宮沢賢治

青空文庫

※

旧暦の六月二十四日の晩でした。

北^{きた}上^{かみ}川の水は黒の寒天よりもつとなめらかにすべり獅子鼻^{ししはな}

は微^{かす}かな星のあかりの底にまつくろに突き出てゐました。

獅子鼻の上の松林は、もちろんもちろん、まっ黒でしたがそれでも林の中に入って行きますと、その脚の長い松の木の高い梢^{こずえ}が、一本一本空の天の川や、星座にすかし出されて見えてゐました。

松かさだか鳥だかわからない黒いものがたくさんその梢にとま
つてゐるやうでした。

そして林の底の萱かやの葉は夏の夜の雫しづくをもうポトポト落して居をりました。

その松林のずうつとずうつと高い処ところで誰たれかゴホゴホ唱へてゐます。

「爾その時に疾翔しつしよう大力たいりき、爾迦夷るかゐに告げて曰く、諦いはに聴あきらけ、諦かに聴きけ、善よく之これを思念せよ、我なんぢ今汝なに、梟鷄けうもろもろ諸の悪禽あくきん、離苦解脱りくげだつの道を述べん、と。

爾迦夷るかゐ、則すなはち、両翼を開張し、虔うやうやしく頸くびを垂れて、座を離れ、低く飛揚して、疾翔大力を讃嘆すること三匝さんさふにして、徐おもむろに座に復し、拝跪はいきして唯願ただふらく、疾翔大力、疾翔大力、たゞ我等たれが為ために、これを説きたまへ。たゞ我等が為ために、之を説き給へと。

疾翔大力、微笑して、金色こんじきの円光もつかうべかぶを以て頭に被れるに、その

光あまね、遍く一座を照し、諸鳥歡喜充滿せり。則ち説いて曰く、

汝等審に諸の惡業あくごふを作る。或は夜陰あるいを以て、小禽せうきんの家に

至る。時に小禽、既に終日日光に浴し、歌唄跳躍かばいして疲労をなし、

唯唯甘美の睡眠中にあり。汝等飛躍して之を握つかむ。利爪りさう深くその

身に入り、諸の小禽せうきん、痛苦又声を発するなし。則ち之を裂きて

擅ほしいままに噉食じきす。或は沼田せうでんに至り、螺蛤らかふを啄ついばむ。螺蛤軟泥中にあ

り、心柔にうなんにして、唯温水を憶おもふ。時に俄にはかに身、空中にあり、

或は直ちに身を破る、悶乱もんらん声を絶す。汝等之を噉食たんじきするに、

又懺悔ざんげの念あることなし。

斯かくごとの如きの諸の惡業もろもろあくごふ、挙げて数ふるなし。惡業を以ての故に、

更に又諸の悪業を作る。継起して遂に竟ることはなし。昼は則ち日光を懼れ又人及諸の強鳥を恐る。心暫くも安らかなるなし、一度梟身を尽して、又新に梟身を得、審に諸の苦患を被りて、又尽ることなし。」

俄かに声が絶え、林の中はしいんとなりました。たゞかすかなかすかなすゝり泣きの声が、あちこちに聞えるばかり、たしかにそれは梟のお経だったのです。

しばらくたって、西の遠くの方を、汽車のごうと走る音がしました。その音は、今度は東の方の丘に響いて、ごんごんとこだまをかへして来ました。

林はまたしづまりかへりました。よくよく梢をすかして見まし

たら、やつぱりそれは梟ひきでした。一疋ひきの大きなのは、林の中の一
番高い松の木の、一番高い枝にとまり、そのまはりの木のあちこ
ちの枝には、大きなのや小さいのや、もうたくさんのふくろふが、
じつととまってだまってゐました。ほんのときどき、かすかなか
すかなため息の音や、すゝり泣きの声がするばかりです。

ゴホゴホ声が又起りました。

「たゞ今のご文もんは、梟けうし守護章しゅごしやうというて、誰たれも存知の有り難いお
経の中の一とこぢや。たゞ今から、暫時しばしの間、そのご文の講釈を
致す。みなみなの衆、ようく心を留めて聞かしやれ。折角鳥に生れて
来ても、たゞ腹はらが空すいた、取つて食ふ、睡ねむくなつた、巢ねすに入るで
はなんの所詮しよせんもないことぢやぞよ。それも鳥に生れてたゞやす

やすと生きるというても、まことはたゞの一日とても、たゞごとではないのぞよ、こちらが一日生きるには、雀すずめやつぐみや、たにしやみゝずが、十や二十も殺されねばならぬ、たゞ今のご文にあらしやるとほりぢや。こゝの道理をよく聴きわけて、必らずうかうか短い一生をあだにすごすではないぞよ。これからご文に入るぢや。子供らも、こらへて睡るではないぞ。よしかな。」

林の中は又しいんとなりました。さっきの汽車が、まだ遠くの遠くの方で鳴つてゐます。

「爾その時に疾翔しつしよう大力たいりき、爾迦夷るかゐに告げて曰いはくと、まづ疾翔大力とは、いかなるお方ぢやか、それを話さなければならんぢや。

疾翔大力と申しあげるは、せしんだいばさつ施身大菩薩のことぢや。もと鳥の

中から菩提ぼだいしん心を発して、発願ほつぐわんした大力の菩薩ぢや。疾翔とは早く飛ぶといふことぢや。捨身菩薩がもとの鳥の形に身をなして、空をお飛びになるときは、一揚というて、一はゞたきに、六千由旬ゆじゆんを行きなさる。そのいはれより疾翔と申さるゝ、大力といふは、お徳によつて、たとへ火の中水の中、たゞこの菩薩を念ずるものは、捨身大菩薩、必らず飛び込んで、お救ひになり、その淨明じやうみやうの天上にお連れなさる、その時火に入つて身の毛一つきずつも傷かず、水に潜くぐつて、羽、塵ちりほどもぬれぬといふ、そのお徳をば、大力とかう申しあげるのぢや。されば疾翔大力とは、捨身大菩薩を、鳥より申しあげる別号ぢや、まあさう申しては失礼なれど、鳥より仰ぎ奉る一つのあだ名ぢやと、斯かう考へてよろしから

う。」

声がしばらくとぎれました。林はしいんとなりました。たゞ下の北上川の淵で、^{ふち}鱒^{ます}か何かのはねる音が、バチヤンと聞えたただけでした。

^{ふくろふ}梟の、きつと大僧正か僧正でせう、坊さんの講義が又はじまりました。

「さらば疾翔大力は、いかなればとて、われわれ同様^{いや}賤しい鳥の身分より、その様な結構のお身となられたか。結構のことぢや。ご自分も又ほかの一切のものも、本願のごとくにお救ひなされることなのぢや。さほど尊いご身分にいなことでなられたかとなれば、なかなか容易のことではあらぬぞよ。疾翔大力さまはもと

は一足の雀すずめでござらしやつたのぢや。南天竺なんてんぢくの、ある家の棟むねに
 棲すまはれた。ある年非常な饑饉ききんが来て、米もとれねば木の実もな
 らず、草さへ枯れたことがござつた。鳥もけものも、みな飢ゑ死
 にぢや人もばたばた倒れたぢや。もう炎天と飢渴きかつのために人にも鳥
 にも、親兄弟の見さかひなく、この世からなる餓鬼道がきだうぢや。その
 時疾翔大力は、まだ力ない雀でござらしやつたなれど、つくづく
 これをご覧じて、世の浅間あさましさはかなさに、泪なみだをながしていらし
 やれた。中にもその家の親子二人、子はまだ六つになるならず、
 母親とてもその大飢渴だいきかつに、どこから食じきを得るでなし、もうあす
 あすに二人もろとも見す見す餓死を待つたのぢや。この時、疾しつし
 翔ようたいりき大力は、上よりこれをながめられあまりのことにしばしは

途方にくれなされたが、日ごろの恩を報ずるは、たゞこの時と勇
みたち、つかれた羽をうちのぼし、はるか遠くの林まで、親子の
食を^{じき}たづねたげな。一念天に届いたか、ある大林のその中に、名
さへも知らぬ木なれども、色もにほひもいと高き、十の木の実を
お見附けなされたぢや。さればもはや疾翔大力は、われを忘れて、
十たびその実をおのがあるじの棟^{むね}に運び、親子の上より落された
ぢや。その十たび目は、あまりの飢ゑと身にあまる、その実の重
さにまなこもくらみ、五たび土に落ちたれど、たゞ報恩の一念に、
ついご自分にはその実を啄^{ついば}みなさらなんだ、おもひとゞいてその
十番目の実を、無事に親子に届けたとき、あまりの疲れと張りつ
めた心のゆるみに、ついそのまゝにお倒れなされたぢや。されど

もややあつて正氣に復し下の模様を見てあれば、いかにもその子は勢せいも増し、たゞいたけなく悦よろこんでゐる如ごとくなれども、親はかの実も自らは口にせなんぢや、いよいよ餓ゑて倒れるやうす、疾翔大力これを見て、はやこの上はこの身を以て親の餌食ゑじきとならんものと、いきなり堅く身をぢぢめ、息を殺してはりより床へと落ちなされたのぢや。その痛さより、身は砕くるかと思へども、なほも命はあらしやつた。されども慈悲もある人の、生きたと見てはとても食たうべはせまいとて、息を殺し眼めをつぶつてゐられたぢや。そしてたうとう願かなつてその親子をば養はれたぢや。その功德くどくより、疾翔大力様は、つひに仏にあはれたぢや。そして次第に法ほ力ふりきを得て、やがてはさきにも申した如く、火の中に入れどもそ

の毛一つも傷つかず、水に入れどもその羽一つぬれぬといふ、大力の菩薩ぼさつとなられたぢや。今このご文は、この大菩薩が、悪業あくごふのわれらをあはれみて、救護の道をば説かしやれた。その始めの方ぢや。しばらく休んで次の講座で述べるといたす。

南無疾翔大力、南無疾翔大力。

みな衆しばらくゆるりとやすみなされ。」

いちばん高い木の黒い影が、ばたばた鳴つて向ふの低い木の方へ移つたやうでした。やつぱりふくろふだったのです。

それと同時に、林の中は俄にはかにばさばさ羽の音がしたり、嘴くちばしのカチカチ鳴る音、低くごろごろつぶやく音などで、一杯になりました。天の川が大分まはり大熊星おほぐまぼしがチカチカまたゝき、それか

ら東の山脈の上の空はぼおつと古めかしい黄金きんいろに明るくなりました。

前の汽車と停車場で交換したのでせうか、こんどは南の方へごとごと走る音がしました。何だか車のひゞきが太へん遅く貨物列車らしかったのです。

そのとき、黒い東の山脈の上に何かちらつと黄いろな尖とがつた変なカタチのものがあらはれました。梟ふくろふどもは俄にざわつとしました。二十四日の黄金きんの角つの、鎌かまの形の月だったのです。忽たちまちすうつと昇つてしまひました。沼の底の光のやうな朧おぼろな青いあかりがぼおつと林の高い梢こずゑにそゞぎ一疋ひきの大きな梟ふくろふが翅はねをひるがへしてゐるのもひらひら銀いろに見えました。さつきの説教の松の木のま

はりになった六本にはどれにも四足ひきから八足ぐらゐるまで梟がとま
つてゐました。低く出た三本のならんだ枝に三足の子供の梟がと
まつてゐました。きつと兄弟だつたでせうがどれも銀いろで大さ
はみな同じでした。その中でこちらの二足は大分厭あきてゐるやう
でした。片つ方の翅をひらいたり、片脚でぶるぶる立ったり、枝
へ爪つめを引っかけてくるつと逆さになつて小笠原島のかうもりのま
ねをしたりしてゐました。

それから何か云いつてゐました。

「そら、大の字やつて見せようか。大の字なんか何でもないよ。」

「大の字なんか、僕ぼくだつてできらあ。」

「できるかい。できるならやつてごらん。」

「そら。」その小さな子供の鼻はほんの一寸ちよつとの間、消防のやるやうな逆さ大の字をやりました。

「何だい。そればつかしかい。そればつかしかい。」

「だって、やったんないゝんだらう。」

「大の字にならなかつたい。たゞの十の字だつたい、脚が開かないぢやないか。」

「おい、おとなしくしろ。みんなに笑はれるぞ。」すぐ上の枝に居たお父さんのふくろふがその大きなぎらぎら青びかりする眼でこつちを見ながら云ひました。眼のまはりの赤い隈くまもはつきり見えしました。

ところがなかなか小さな鼻の兄弟は云ふことをききませんでし

た。

「十の字、ほう、たての棒の二つある十の字があるだらうか。」

「二つに開かなかつたい。」

「開いたよ。」

「何だ生意気な。」もう一疋は枝からとび立ちました。もう一疋もとび立ちました。二疋はばたばた、けり合つてはねが月の光に銀色にひるがへりながら下へ落ちました。

おっかさんのふくろふらしいさつきのお父さんのとならんでゐた茶いろの少し小型のがすうつと下へおりて行きました。それから下の方で泣声が起りました。けれども間もなくおっかさんの鼻はもとの処へ^{ところ}とびあがり小さな二疋ものぼつて来て二疋とももと

のところへとまって片脚で眼をこすりました。お母さんの梟も一度叱しかりました。その眼も青くぎらぎらしました。

「ほんたうにお前たちつたら仕方ないねえ。みなさんの見ていらつしやる処でもうすぐきつと喧嘩けんくわするんだもの。なぜ穂吉ちゃんおとなのやうに、じつとおとなしくしてゐないんだらうねえ。」

穂吉と呼ばれた梟は、三疋の中では一番小さいやうでしたが一番温和おとなしいやうでした。じつとまつすぐを向いて、枝にとまつたまゝ、はじめからおしまひまで、しんとしてゐました。

その木の一番高い枝にとまりからだ中銀いろで大きく頬ほほをふくらせ今の講義のやすみのひまを水銀のやうな月光をあびてゆらりゆらりとゐねむりしてゐるのはたしかに梟ふくろふのおぢいさんでした。

月はもう余程高くなり、星座もずるぶんめぐりました。蝸座さそりざ

は西へ沈むとこでしたし、天の川もすっかり斜めになりました。

向ふの低い松の木から、さっきの年とし老りの坊さんの梟が、斜に飛んでさっきの通り、説教の枝にとまりました。

急に林のざわざわがやんで、しづかにしづかになりました。風のためか、今まで聞えなかった遠くの瀬の音が、ひゞいて参りました。坊さんの梟はゴホンゴホンと二つ三つせきばらひをして又はじめました。

「爾その時に、疾しつ翔しょう大力たいりき、爾る迦か夷ゐに告いげて曰いはく、諦あきらに聴きけ、諦諦に聴聴け、善よく之これを思念しんねんせよ。我われ今なんぢ汝に、梟けう鷄もろ諸あきの惡きん禽りく、離り苦く解げ脱だつの道を述べんと。

爾迦夷、則ち兩翼を開張し、虔しく頸を垂れて座を離れ、低く

飛揚して疾翔大力を讃嘆すること三匝にして、徐に座に復し、

拝跪して唯願ふらく、疾翔大力、疾翔大力、たゞ我等が為にこれ

を説き給へ。たゞ我等が為に之を説き給へと。

疾翔大力微笑して、金色の円光を以て頭に被れるに、その光

遍く一座を照し、諸鳥歡喜充滿せり。則ち説いて曰く、

汝等審に諸の惡業を作る。或は夜陰を以て小禽の家に至

る。時に小禽既に終日日光に浴し、歌唄跳躍して疲労をなし、唯

唯甘美の睡眠中にあり。汝等飛躍して之を握む。利爪深くその

身に入り、諸の小禽痛苦又声を発するなし。則ち之を裂きて擅

に噉食す。或は沼田に至り、螺蛤を啄む。螺蛤軟泥中にあり、

心柔にうなんにして、唯温水を憶おもふ。時に俄にはかに身空中にあり、或は直ちに身を破る、悶もんらん乱声を絶す。汝等之を噉たんじき食するに、又懺悔の念あることなし。

斯かくごとの如きの諸の悪業、挙げて数ふるなし。悪業を以ての故に、

更に又諸の悪業を作る。継起して遂つひに竟をはることなし。昼は則ち日

光を懼おそれ、又人及諸の強鳥を恐る。心暫しばらくも安らかなることな

し、一度梟身ひとたびけうしんを尽して、又新あらたに梟身を得つまびらか。審に諸の苦患かうむを被

りて、又尽くることなし。で前の座では、捨身しやしん菩薩ぼさつを疾翔しつしよう

大力いりきと呼びあげるわけあひ又、その願ぐわん成じやうの因縁をお話いた

したぢやが、次に爾迦夷るかゐに告げて曰いはくとある。爾迦夷といふはこ

のとき我等と同様梟ふくろふぢや。われらのご先祖と、一緒にお棲すまひなさ

れたお方ぢや。今でも爾迦夷しやうにん上人と申しあげて、毎月十三日
 がご命日ぢや。いづれの家でも、梟の限りは、十三日にはなら櫓の木
 の葉を取てと参て、爾迦夷上人さまにさしあげるといふことをやる
 ぢや、これは爾迦夷さまが櫓の木にお棲ひなされたからぢや。こ
 の爾迦夷さまは、早くから梟の身のあさましいことをご覚悟遊ば
 され、出離の道を求められたぢやげなが、たうとうその一心の甲か
 斐ひあつて、疾翔大力さまにめぐりあひ、つひにその尊い教を聴聞
 あつて、天上へ行かしやれた。その爾迦夷さまへのご説法ぢや。
 諦あきらに聴け、諦に聴け。善よく之これを思念せよと。心をしづめてよく聴
 けよ、心をしづめてよく聴けよと斯かうぢや。いづれの説法の座で
 も、よくよく心をしづめ耳をすまして聴くことは大切なのぢや。

上の空で聞いてゐたでは何にもならぬぢや。」

ところがこのとき、さつきの喧嘩けんくわをした二疋ひきの子供のふくろふがもう説教を聴くのは厭あきてお互にらめくらをはじめてゐました。そこは茂りあつた枝のかげで、まっくらでしたが、二疋はどつちもあらんかぎりりと眼を開いてゐましたので、ぎろぎろりん燐を燃したやうに青く光りました。そこでたうとう二疋とも一ぺんに噴き出して一緒に、

「お前の眼は大きいねえ。」と云ひました。

その声は幸さいはひに少しつんぼふくろふの梟の坊さんには聞えませんでした。ほかの梟たちはみんなこつちを振り向きしました。兄弟の穂吉といふ梟は、そこで大へんきまり悪く思つてもちもぢしながら頭だけ

はじつと垂れてゐました。二足はみんなのこつちを見るのを枝のかげになつてかくれるやうにしながら、

「おい、もう遁^にげて遊びに行かう。」

「どこへ。」

「実相寺の林さ。」

「行かうか。」

「うん、行かう。穂吉ちゃんも行かないか。」

「ううん。」穂吉は頭をふりました。

「我今汝^{なんぢ}に、梟鷁^{けうもつ}諸^{もろ}の悪禽^{あくきん}、離苦^{りく}解^げ脱^{だつ}の道を述べんといふこと

は。」説教が又続きました。二足はもうそつと遁^にげ出し、穂吉はいよいよ堅くなつて、兄弟三人分一人で聴かうといふ風でした。

※

その次の日の六月二十五日の晩でした。

丁度ゆふべと同じ時刻でしたのに、説教はまだ始まらず、あの説教の坊さんは、眼を瞑^{つぶ}つてだまって説教の木の高い枝にとまり、まはりにゆふべと同じにとまった沢山の梟どもはなぜか大へんな興奮してゐる模様でした。女のふくろふにはおろおろ泣いてゐるのもありましたし、男のふくろふはもうとても斯^かうしてゐられないといふやうにプリプリしてゐました。それにあのゆふべの三人兄弟の家族の中では一番高い処^{ところ}に居るおぢいさんの梟はもうすっかり眼を泣きはらして頬^{ほほ}が時々びくびく云ひ、涙^{なみだ}は声なくその

赤くふくれた眼から落ちてゐました。

もちろんふくろふのお母さんはしくしくしく泣いてゐました。乱暴ものの二疋の兄弟も不思議にその晩はきちんと座つて、大きな眼をじつと下に落してゐました。又ふくろふのお父さんは、しきりに西の方を見てゐました。けれども一体どうしたのかあの温和おとなしい穂吉の形が見えませんでした。風が少し出て来ましたので松の梢こずえはみなしづかにゆすれました。

空には所々雲もうかんでゐるやうでした。それは星があちこちめくらにでもなつたやうに黒くて光つてゐなかつたからです。

には俄かに西の方から一疋びきの大きなかつしよく褐色ふくろふの梟が飛んで来ました。

そしてみんなの入口の低い木にとまって声をひそめて云ひました。

「やっぱり駄目だ^{だめ}。穂吉さんもうあきらめてゐるやうだよ。さつきまではばたばた云つてゐたけれども、もう今はおとなしく白^{うす}の上にとまつてゐるよ。それから紐^{ひも}が何だか變つたやうだよ。前は右足だったが、今度は左脚に結^{ゆは}ひつけられて、それに紐の色が赤いんだ。けれどもたゞひとついゝことは、みんな大抵寢てしまつたんだ。さつきまで穂吉さんの眼を指で突つつかうとした子供などは、腹かけだけして、大の字になつて寢てゐるよ。」

穂吉のお母さんの梶は、まるで火がついたやうに声をあげて泣きました。それにつれて林中の女のふくろふがみなしいんしいんと泣きました。

梶の坊さんは、じつと星ぞらを見あげて、それからしづかにた

づねました。

「この世界は全くこの通りぢや。たゞもうみんなかなしいことばかりなのぢや。どうして又あんなおとなしい子が、人につかまるやうな処ところに出たもんぢやらうなあ。」

説教の木のとなりに居た鼠ねずみいろの梟は恭々しく答へました。

「今朝あけ方近くなつてから、兄弟三人で出掛けたさうでございます。いつも人の来るやうな処ではなかったのでございます。そのうち朝日が出ましたので、眩まぶしさに三疋とも、しばらく眼を瞑つぶつてゐたさうでございます。すると、丁度子供が二人、草刈りに来て居ましたさうで、穂吉もそれを知らないうちに、一人がそつとのぼつて来て、穂吉の足を捉つかまへてしまったと申します。」

「あゝあはれなことぢや、ふびんなはなしぢや、あんなおとなしいゝ子でも、何の因果ぢややら。できるなればわしなどで代つてやりたいぢや。」

林はまたしいんとなりました。しばらくたつて、またばたばたと一足の梟が飛んで戻つて参りました。

「穂吉さんはね、臼の上をあるいてゐたよ。あの赤の紐を引き裂かうとしてゐたやうだったけれど、なかなか容易ぢやないんだ。

私はもう、どこか隙間から飛び込んで行つて、手伝つてあげようすきまと、何べんも何べんも家のまはりを飛んで見たけれど、どこにもあいてる所はないんだらう。ほんたうに可哀さうだねえ、穂吉さんは、けれども泣いぢやゐないよ。」

梟のお母さんが、大きな眼を泣いてまぶしさうにしよぼしよぼしながら訊ねました。

「あの家に猫は居ないやうでございましたか。」

「えゝ、猫は居なかったやうですよ。きつと居ないんです。ずゐぶん暫らく、私はのぞいてゐたんですけれど、たうとう見えなかつたのですから。」

「そんならまあ安心でございます。ほんたうにみなさまに飛んだご迷惑をかけてお申し訳けもございません。みんな穂吉の不注意からでございます。」

「いゝえ、いゝえ、そんなことはありません。あんな賢いお子さんでも災難といふものは仕方ありません。」

林中の女のふくろふがまるで口口に答へました。その音は二町ばかり西の方の大きな藁屋根わらやねの中に捕はれてゐる穂吉ところの処まで、ほんのかすかにでしたけれども聞えたのです。

ふくろふのおぢいさんが度々声がかすれながらふくろふのお父さんに云ひました。

「もうさうなつては仕方ない。お前は行つて穂吉にそつと教へてやつたらよからう、もうこの上は決してばたばたもがいたり、怒つて人に噛かみ付いたりしてはいけない。今日中誰たれもお前を殺さない処を見ると、きつと田螺たにしか何かで飼つて置くつもりだらうから、今までのやうに温和おとなしくして、決して人に逆さかふな、とな。斯かう云つて教へて来たらよからう。」

ふくろふ
梟のお父さんは、首を垂れてだまって聴いてゐました。梟の和をしやう

尚さんも遠くからこれにできるだけ耳を傾けてゐましたが大体そのわけがわかつたらしく言ひ添へました。

「さうぢや、さうぢや。いゝ分別ぢや。序ついでに斯う教へて来なされ。

このやうなひどい目にあうて、何悪いことしたむくいぢやと、恨むやうなことがあつてはならぬ。この世の罪も数知らず、さきの世の罪も数かぎりない事ぢやほどに、この災難もあるのぢやと、よくあきらめて、あんまりひとり嘆くでない、あんまり泣けば心も沈み、からだもとかく損そこねるぢや、たとへ足には紐ひもがあるとも、今こゝへ来て、はじめてとまった処ぢやと、いつも気軽でゐねばならぬ、とな、斯う云うて下され。あゝ、されども、されども、

とられた者は又別ぢや。何のさほりも無いものが、とや斯う言うても、何にもならぬ。あゝ可哀さうなことぢや不愍ふびんなことぢや。」

お父さんの梶は何べんも頭を下げました。

「ありがたうございます。ありがたうございます。もうきつとさう申し伝へて参ります。斯こんなお語ことばを伝へ聞いたたら、もう死んでもよいと申しますでございませう。」

「いや、いや、さうぢや。斯うも云うて下され。いくら飼はれるときまっても、子供心はもとより一向たよりないもの、又近くに猫犬なども居ることぢや、もし万一の場合は、たゞあの疾しつしよ翔しょううたいりき大力のおん名を唱へなされとな。さう云うて下され。おゝ不愍ふびんぢや。」

「ありがたうございます。では行つて参ります。」

梶のお母さんが、泣きむせびながら申しました。

「ああ、もしどうぞ、いのちのある間は朝夕二度、私に聞えるやう高く啼ないて呉くれとおっしゃつて下さいませ。」

「いゝよ。ではみなさん、行つて参ります。」

梶のお父さんは、二三度羽ばたきをして見てから、音もなく滑るやうに向ふへ飛んで行きました。梶の坊さんがそれをじつと見送つてゐましたが、俄にはかにからだをりんとして言ひました。

「みな衆。いつまで泣いてもはてないぢや。ここの世界は苦くがい界といふ、又忍土とも名づけるぢや。みんなせつないことばかり、涙の乾くひまはないのぢや。たゞこの上は、われらと衆生と、早

くこの苦を離れる道を知るのが肝要ぢや。この因縁でみな衆も、よくよく心をひそめて聞きなされ。たゞ一人でも穂吉のことから、まことに菩提ぼだいの心を発すなれば、穂吉の功德くどく又この座のみな衆の功德、かぎりもあらぬことなれば、必らずとくと聴聞ちやうもんなされや。昨夜の続きを講じます。

爾その時に疾翔しっしょう大力たいりき、爾迦夷るかゐに告げて曰く、諦いはに聴け、諦あきらに聴け。善よく之これを思念せよ。我今汝なんぢに、梟鷲けうもつ諸もろの悪あく禽きん、離苦解脱りくげだつの道を述べんと。

爾迦夷るかゐ、則ち兩翼を開張し、度うやうやしく頸くびを垂れて座を離れ、低く飛揚はいきして疾翔しっしょう大力を讃嘆すること三匝さんさふにして、徐おもむろに座に復し、拝跪はいきして唯願ただふらく、疾翔大力、疾翔大力、たゞ我等ためが為にこれ

を説き給へ。たゞ我等が為に之を説き給へと。

疾翔大力微笑して、金色こんじきの円光を以て頭もつに被れるに、その光

遍あまねく一座を照し、諸鳥歡喜充滿せり。則ち説いて曰く、

汝等なんぢら審まじらに諸の悪業を作る。或は夜陰を以て小禽せうきんの家に至る。

時に小禽既すでに終日日光に浴し、歌唄跳躍かばいして疲労をなし、唯唯甘

美の睡眠中にあり。汝等飛躍して之を握つかむ。利爪りさう深くその身に入

り、諸の小禽痛苦又声を発するなし。則ち之を裂きて擅ほしいに噉食たんじき

す。或は沼田せうでんに至り螺蛤らかふを啄ついばむ。螺蛤軟泥中にあり、心柔にうなん

にして唯温水を憶おもふ。時に俄にはかに身空中にあり、或は直ちに身を破

る、悶乱もんらん声を絶す。汝等之を噉食たんじきするに、又懺悔ざんげの念あるこ

となし。

斯かくごとの如きの諸の惡業あくごふ、挙げて数ふるなし。

惡業を以ての故に、更に又諸の惡業を作る。繼起して遂つひに竟をはることなし。昼は則ち日光を懼おそれ、又人及諸およびの強鳥を恐る。心暫しばらくも安らかなることなし。一度梟身ひとたびけうしんを尽して、又新あらたに梟身を得つまびらか、審に諸の患難かうむを被りて、又尽くることなし。

で前の晩は、諸鳥歡喜充滿せりまで、文の如くに講じたが、此この席はその次ぢや。則ち説いて曰くと、これは疾翔大力さまが、爾迦夷上人るかゐのご懇請によつて、直ちに説法をなされたと斯かうぢや。汝等つまびら審に諸の惡業を作ると。汝等といふは、元來はわれわれ梟ふくろやふ鷄とびなどに対して申さるゝのぢやが、ご本意は梟にあるのぢや、あとのご文の罪相を拝するに、みなわれわれのことぢや。惡業とい

ふは、悪は悪いぢや、業ごふとは梵語ぼんごでカルマというて、すべて過去になしたることのまだ報むくいとなつてあらはれぬを業といふ、善業悪業あるぢや。こゝでは悪業といふ。その事柄を次にあげなされたぢや。或は夜陰を以て、小禽せうきんの家に至ると。みなひとごとの衆、他人事ではないぞよ。よくよく自らの胸にたづねて見なされ。夜陰とは夜のくらやみぢや。以てとは、これは乗じてといふがやうの意味ぢや。夜のくらやみに乗じてと、斯うぢや。小禽の家に至る。小禽とは、雀すずめ、山雀やまがら、四十雀しじふから、ひは、百舌もず、みそさざい、かけす、つぐみ、すべて形小にして、力ないものは、みな小禽ぢや。その形小さく力無い鳥の家に参るといふのぢやが、参るといふてもたゞ訪ねて参るでもなければ、遊びに参るでもないぢや、内に

深く残忍の想を潜め、外又恐るべく悲しむべき夜叉相やしゃさうを浮べ、
 密ひそやかに忍んで参ると斯かう云ふことぢや。このご説法のころは、
 われらの心も未だ仲々善心もあつたぢや、小禽せうきんの家に至るとお
 説きなされば、はや聴法の者、みな慄然りつぜんとして座に耐へなかつ
 たぢや。今は仲々さうでない。今ならば疾翔しつしよう大力さま、まだ
 まだ強く烈はげしくご説法であらうぞよ。みなの衆、よくよく心にし
 みて聞いて下され。

次のご文は、時に小禽すで既に終日日光に浴し、歌唄跳躍かばいして、疲
 労をなし、唯々ただただ甘美の睡眠中にあり。他人事ひとごとではないぞよ。ど
 うぢや、今朝も今朝とて穂吉どの処ところを替へてこの身の上ぢや、「
 説教の坊さんの声が、俄にはかにおろおろして変りました。穂吉のお

母さんの梟ふくろふはまるで帛きぬを裂くやうに泣き出し、一座の女の梟は、たちまちそれに従ついて泣きました。

それから男の梟も泣きました。林の中はたゞむせび泣く声ばかり、風も出て来て、木はみなぐらぐらゆれましたが、仲々誰たれも泣きやみませんでした。星はだんだんめぐり、赤い火星ももう西ぞらに入りました。

梟の坊さんはしばらくゴホゴホ咳嗽せきをしてゐましたが、やっと心を取り直して、又講義をつゞけました。

「みならうの衆、まづ試ためしに、自分がみそさざいにでもなつたと考へてご覧らんじ。な。天道てんとうさまが、東の空へ金こん色じきの矢を射なさるぢや、林樹は青く枝は揺るゝ、楽しく歌をばうたふのぢや、仲よく

あうた友だちと、枝から枝へ木から木へ、天道さまの光の中を、歌つて歌つて参るのぢや、ひるごろならば、涼しい葉陰にしばしやすんで黙るのぢや、又ちちと鳴いて飛び立つぢや、空の青板をめざすのぢや、又小流れに参るのぢや、心の合うた友だちと、たゞしば暫らくも離れずに、歌つて歌つて参るのぢや、さてお天道さまが、おかくれなされる、からだはつかれてとろりとなる、油のごとく、溶けるごとくぢや。いつかまぶたは閉ぢるのぢや、昼の景色を夢見るぢや、からだは枝に留まれど、心はなほも飛びめぐる、たのしく甘いつかれの夢の光の中ぢや。そのとき俄かにひやりとする。夢かうつつか、おどろ愕き見れば、わが身は裂けて、血は流れるぢや。燃えるやうなる、二つの眼が光つてわれを見詰むるぢや。どうぢ

や、声さへ発^たたうにも、咽喉^{のど}が狂うて音が出ぬぢや。これが則^{すなは}ち
 利爪^{りきょう}深くその身に入り、諸^{もろもろ}の小禽^{せうきん}痛苦又声を発するなしの意な
 のぢやぞ。されどもこれは、取らるゝ鳥より見たるものぢや。捕
 る此方^{こなた}より眺むれば、飛躍して之を握^{つか}むと斯うぢや。何の罪なく
 眠れるものを、たゞ一打^{ひとつうち}ととびかゝり、鋭^{つめ}い爪でその柔^{やはらか}な身体
 をちぎる、鳥は声さへよう発てぬ、こちらはそれを嘲笑^{あざわら}ひつゝ、
 引き裂くぢや。何たるあはれのことぢや。この身とて、今は法師
 にて、鳥も魚も襲はねど、昔おもへば身も世もあらぬ。あゝ罪^{ざいご}
 業^ふのこのからだ、夜毎^{よごと}夜毎の夢としては、同じく夜叉^{やしや}の業をなす。
 宿業^{しゆくごふ}の恐ろしさ、たゞたゞ呆^{あき}るゝばかりなのぢや。」

風がザアツとやって来ました。木はみな波のやうにゆすれ、坊

さんの梟も、その中に漂ふ舟のやうにうごきました。

そして東の山のはから、昨日の金角、二十五日のお月さまが、昨日よりは又ずうっと瘠^やせて上りました。林の中はうすいうすい霧のやうなものでいっぱいになり、西の方からあ^{ふくろふ}の梟のお父さんがしよんぼり飛んで帰つて来ました。

※

旧曆六月二十六日の晩でした。

そらがあんまりよく霽^はれてもう天の川の水は、すっかりすきとほつて冷たく、底のすなごも数へられるやう、またじつと眼をつ

ぶつてゐると、その流れの音さへも聞えるやうな気がしました。けれどもそれは或は空のあるい高いところ処を吹いてゐた風の音だったかも知れません。なぜなら、星がかげろふの向ふ側にでもあるやうに、少しゆれたり明るくなったり暗くなったりしてゐましたから。

獅子鼻ししはなの上の松林には今夜も梟ふくろふの群が集まりました。今夜は穂

吉が来てゐました。来てはゐましたが一昨日をととひの晩の処にでなしに、

おぢいさんのとまる処よりもっと高いところで小さな枝の二本行きちがひ、それからもっと小さな枝が四五本出て、一寸ちよつき盃かづきの

やうな形になつた処へ、どこから持つて来たか藁屑わらくづや髪の毛な

どを敷いて臨時に巢がつくられてゐました。その中に穂吉が半分横になつて、じつと目をつぶつてゐました。梟のお母さんと二人

の兄弟とが穂吉のまはりに座つて穂吉のからだを支へるやうにしてゐました。林中のふくろふは、今夜は一人も泣いてはゐませんでした。怒つてゐることはみんな、昨夜^{ゆふべどころ}処ではありませんでした。

「傷みはどうぢや。いくらか薄らいだかの。」

あの坊さんの梟がいつもの高い処からやさしく訊^{たづ}ねました。穂吉は何か云はうとしたやうでしたが、たゞ眼がパチパチしたばかり、お母さんが代つて答へました。

「折角こらへてゐるやうでございます。よく物が申せないのでございます。それでもどうしても、今夜のお説教を聴^{ちやうもん}聞いたしたいといふやうでございましたので。もうどうかかまはずご講義

をねがひたう存じます。」

梟の坊さんは空を見上げました。

「殊勝なお心掛けぢや。それなればこそ、たとへ脚をば折られても、二度と父母の処へも戻ったのぢや。なれども健すこやかな二本の脚を、何面白いこともないに、振ねぢつて折つて放すとは、何といふ浅あ間さましい人間の心ぢや。」

「放されても二本の脚を折られてどうしてまあすぐ飛べませう。あの萱かやはら原の中に落ちてひいひい泣いてゐたのでございます。それでも昼の間は、誰たれも気付かずやつと夕刻、私が顔を見ようと出て行きましたらこのていたらくでございします。」

「うん。もつとも尤ぢや。なれども他人は恨むものではないぞよ。みな自みづか

らがもとなのぢや。恨みの心は修羅しゆらとなる。かけても他人は恨むでない。」

穂吉はこれをぼんやり夢のやうに聞いてゐました。子供がもう厭あきて「遁にがしてやるよ」といつて外へ連れて出たのでした。そのとき、ポキツと脚を折ったのです。その両脚は今でもまだしんと痛みます。眼を開いてもあたりがみんなぐらぐらして空さへ高くなったり低くなったりわくわくゆれてゐるやう、みんなの声も、たゞぼんやりと水の中からでも聞くやうです。ああ僕ぼくはきつともう死ぬんだ。こんなにつらい位ならほんたうに死んだ方がいい。それでもお父さんやお母さんは泣くだらう。泣くたつて一体お父さんたちは、まだ僕の近くに居るだらうか、あゝ痛い痛い。

穂吉は声もなく泣きました。

「あんまりひどいやつらだ。こつちは何一つ向ふの為ために悪いやうなことをしないんだ。それをこんなことをして、よこす。もうだまつてはゐられない。何かし返ししてやらう。」一疋びきの若い梟ふくろふが高く云ひました。すぐ隣りのが答へました。

「火をつけようぢやないか。今度屑くづ焼きのある晩に燃えてる長い藁わらを、一本あの屋根までくはへて来よう。なあに十本も二十本も運んでゐるうちにはどれかすぐ燃えつくよ。けれども火事で焼けるのはあんまり楽だ。何かもう少しひどいことがないだらうか。」
又その隣りが答へました。

「戸のあいてる時をねらつて赤子の頭を突いてやれ。畜生め。」

梟の坊さんは、じつとみんなの云ふのを聴いてゐましたがこの時しづかに云ひました。

「いやいや、みな衆、それはいかぬぢや。これほど手ひどい事なれば、必らず仇を返したいはもちろんの事ながら、それでは血で血を洗ふのぢや。こなたの胸が霽れるときは、かなたの心は燃えるのぢや。いつかはまたもつと手ひどく仇を受けるぢや、この身終つて次の生まで、その妄執は絶えぬのぢや。遂には共に修羅に入り闘諍しばらくもひまはないぢや。必らずともにさやうのたくみはならぬぞや。」

けたたましくふくろふのお母さんが叫びました。

「穂吉穂吉しっかりおし。」

みんなびくつとしました。穂吉のお父さんもあわてて穂吉の居た枝に飛んで行きましたがとまる所がありませんでしたからすぐその上の枝にとまりました。穂吉のおぢいさんも行きました。みんなもまはりに集りました。穂吉はどうしたのか折られた脚をぶるぶる云はせその眼は白く閉ぢたのです。お父さんの鼻は高く叫びました。

「穂吉、しっかりするんだよ。今お説教がはじまるから。」

穂吉はパチツと眼をひらきました。それから少し起きあがりました。見えない眼でむりに向ふを見ようとしてゐるやうでした。

「まあよかったね。やっぱりつかれてゐるんだらう。」女の鼻たちは云ひ合ひました。

坊さんの梟はそこで云ひました。

「さあ、講釈をはじめよう。みな衆座にお戻りなされ。今夜は二十六日ぢや、来月二十六日はみな衆も存知の通り、二十六夜待ちぢや。月天子山ぐわつてんしのはを出いでんとし、光を放ちたまふとき、疾翔しつしょう大力たいりき、爾迦夷波羅夷るかゐはらゐの三尊が、東のそらに出現します。今宵こよひは月は異なれど、まことの心には又あらはれ給はぬことでない。穂吉どのも、たゞ一途いちづに聴聞ちやうもんの志ぢやげなで、これからさつそく講ずるといたさう。穂吉どの、さぞ痛からう苦しからう、お経の文とて仲々耳には入るまいなれど、そのいたみ悩みの心の中に、いよいよ深く疾翔大力さまのお慈悲を刻みつけるぢやぞ、いゝかや、まことにそれこそ菩提ぼだいのたねぢや。」

梟の坊さんの声が又少し変りました。一座はしいんとなりました。林の中にもう鳴き出した秋の虫があります。坊さんはしばらく息をこらして気を取り直しそれから厳めしい声で願をたててから昨夜の続きをはじめました。

「梟鷄救護章 梟鷄救護章」

諸の仁者掌を合せて至心に聴き給へ。我今疾翔大力が威

神力を享けて梟鷄救護章の一節を講ぜんとす。唯願ふらくはかの

如来大慈大悲我が小願の中に於て大神力を現じ給ひ妄言綺語

の淤泥を化して光明顯色の淨瑠璃となし、浮華の中より清

淨の青蓮華を開かしめ給はんことを。至心欲願、南無仏南無

仏南無仏。

爾その時に疾翔大力、爾迦夷るかゐに告げて曰く、諦いはに聴け諦あきらに聴け。
 善よく之これを思念せよ。我今汝なんぢに梟鷃もろもろ諸あの惡禽あくきん離苦解脱りくげだつの道を述べ
 んと。

爾迦夷すなは則ち兩翼を開張し、虔うやうやしく頸くびを垂れて座を離れ、低く飛
 揚いきして疾翔大力を讃嘆すること三匝さんさふにして、徐おもむろに座に復し、拝
 跪いきして願ふらく疾翔大力、疾翔大力、たゞ我等ためが為にこれを説き
 給へ。たゞ我等が為にこれを説き給へと。

疾翔大力、微笑して金色こんじきの円光を以て頭もつに被かうべれるに、諸鳥歡
 喜充満せり。則ち説いて曰く、

汝等つまびらか審あに諸あの惡業あくごふを作る。或は夜陰あるいを以て小禽せうきんの家に至る。
 時に小禽す既に終日日光に浴し、歌唄かばい跳躍して疲労をなし、唯唯甘

美の睡眠中にあり、汝等飛躍して之を握む。つか利爪深くその身に入り、諸の小禽痛苦又声を発するなし、則ち之を裂きて擅に噉食ほしいまたんじきす。或は沼田せうでんに至り、螺蛤らかふを啄む。螺蛤軟泥中にあり、心柔にうなんにして唯温水を憶ふ。おも時に俄に身空中にあり、或は直ちに身を破る、悶乱声もんらんを絶す。汝等之を噉食するに、又懺悔ざんげの念あることなし。

悪業あくごふを以ての故に、更に又諸の悪業を作る。継起して遂に竟つひをはることなし。昼は則ち日光を懼れ又人及諸の強鳥おそを恐る。心暫らおよびくも安らかなることなし。一度梟身けうしんを尽して、又新に梟身あらたを得。審つまびらかに諸の患難かうむを被りて、又尽くることなし。

で前の晩は、斯かくの如ごときの諸の悪業、挙げて数ふることなし、ま

で講じたが、今夜はその次ぢや。

悪業を以ての故に、更に又諸の悪業を作ると、これは誠に短いながら、強いお語ぢや。ことば先刻人間に恨みを返すとの議があつた節、申した如くぢや、一の悪業によつて一の悪果を見る。その悪果故に、又新なる悪業を作る。斯の如く展転して、遂にやむときないぢや。車輪のめぐれどもめぐれども終らざるが如くぢや。これを輪廻りんねといひ、流転るてんといふ。悪より悪へとめぐることぢや。継起して遂に竟ることなしと云ふがそれぢや。いつまでたつても終りにならぬ、どこどこまでも悪因悪果、悪果によつて新に悪因をつくる。な。斯うぢや、浮む瀬うかとてもあるまいぢや。昼は則ち日光を懼れ、おそ又人及諸の強鳥およびを恐る。心暫らくも安らかなることなし。しば

これは流転の中の、つらい模様をわれらにわかるやう、直^ぢかに申されたのぢや。勿^{もつ}体^{たい}なくも、我等は光明の日天子^{にってんし}をば憚^{はば}かり奉^{やみ}る。いつも闇とみちづれぢや。東の空が明るくなりて、日天子さまの黄金^{きん}の矢が高く射出さるれば、われらは恐れて遁^にげるのぢや。もし白昼にまなこを正しく開くならば、その日天子の黄金の征^そ欠^{やう}に伐たれるぢや。それほどまでに我等は悪^{あく}業^{ごふ}の身ぢや。又人及諸の強鳥を恐る。な。人を恐るゝことは、今夜今ごろ講ずることの限りでない。思ひ合せてよろしからう。諸の強鳥を恐る。鷹^{たか}やはやぶさ、又さほど強くはなけれども日中なれば鳥などまで恐れねばならぬ情ない身ぢや。はやぶさなれば空よりすぐに落ちて来て、こなたが小鳥をつかむときと同じやうなるありさまぢや、

たちまち空で引き裂かれるぢや、少しのさからひをしたとて、何にもならぬ、げにもげにも浅間あさましくなさないわれらの身ぢや。」
ふくろふ
梟ふくろふの坊さんは一寸ちよつと声を切りました。今夜ももう一時のぼの上りの汽車の音が聞えて来ました。その音を聞くと梟どもは泣きながらも、汽車の赤い明るいならんだ窓のことを考へるのです。講釈がまた始まりました。

「心暫しばらくも安らかなることなしと、どうぢや、みなの衆、たゞの一時いつときでも、ゆつくりと何の心配もなく落ち着いたことがあるかの。もういつでもいつでもびくびくものぢや。一度ひとたび梟身けうしんを尽して又新あらたに梟身を得うと斯かうぢや。泣いて悔やんで悲しんで、つひには年老とる、病気になる、あらんかぎりの難儀をして、それで

死んだら、もうこの様な悪鳥の身を離れるかとならば、仲々さうは参らぬぞや。身に染み込んだ罪業ざいごふから、又梟に生れるぢや。斯かくごとの如くにして百生しやう、二百生、乃至劫ないしこふをも互わたるまで、この梟身を免れぬのぢや。審つまびらかに諸の患難かうむを蒙りて又尽くることなし。もう何もかも辛いことばかりぢや。さて今東の空は黄金色きんになられた。もう月天子ぐわつてんしがお出ましなのぢや。来月二十六夜ならば、このお光しつしやうたいりきに疾翔しつしやうたいりき大力さまを拝み申すぢやなれど、今宵こよひとて又拝み申さぬことでない、みなみなの衆、ようくまごゝろを以て仰ぎ奉るぢや。

二十六夜の金いろの鎌かまの形のお月さまが、しづかにお登りになりました。そこらはぼおつと明るくなり、下では虫にはが俄かにしい

んしいんと鳴き出しました。

遠くの瀬の音もはつきり聞えて参りました。

お月さまは今はすうつと桔梗ききやういろの空におのぼりになりました。それは不思議な黄金きんの船のやうに見えました。

俄かにみんなは息がつまるやうに思ひました。それはそのお月さまの船の尖とがつた右のへさきから、まるで花火のやうに美しい紫いろのけむりのやうなものが、ばりばりと噴き出たからです。けむりは見る間にたなびいて、お月さまの下すっかり山の上に目もさめるやうな紫の雲をつくりました。その雲の上に、金いろの立派な人が三人まっすぐに立ってゐます。まん中の人はせいも高く、大きな眼でじつとこつちを見てゐます。衣のひだまで一一は

つきりわかります。お星さまをちりばめたやうな立派な璣やうらく瑠るをかけてゐました。お月さまが丁度その方の頭のまはりに輪になりました。

右と左に少し丈の低い立派な人が合掌して立つてゐました。その円光はぼんやり黄金きんいろにかすみうしろにある青い星も見えませんでした。雲がだんだんこつちへ近づくやうです。

「南無疾翔なむしつしょう大力たいりき、南無疾翔大力。」

みんなは高く叫びました。その声は林をとゞろかしました。雲がいよいよ近くなり、捨身菩薩しゃしんぼさつのおからだは、十丈ばかりに見えるのかゞやく左手がこつちへ招くやうに伸びたと思ふと、俄にはかに何とも云へないいゝかをりがそこらいちめんにして、もうその紫

の雲も疾翔大力の姿も見えませんでした。たゞその澄み切った桔^き梗^{きやう}いろの空にさっきの黄金^{きん}いろの二十六夜のお月さまが、しづかにかかつてゐるばかりでした。

「おや、穂吉さん、息づかなくなつたよ。」俄に穂吉の兄弟が高く叫びました。

ほんたうに穂吉はもう冷たくなつて少し口をあき、かすかにわらつたまゝ、息がなくなつてゐました。そして汽車の音がまた聞えて来ました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1975（昭和50）年7月15日初版第1刷

1983（昭和58）年12月20日初版第6刷

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これになり、ルビの拗促音も、小書きにしました。

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二十六夜

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>